

Davos Next 2022では、世界中の日本人の子どもたちをつないで、世界的な課題について共に考えるグループワークが予定されています。

今回は、そのグループワークを支える教育工学者の山本良太さんへのインタビューです。Davos Nextの理念に共感し、その後の展開まで見据えている山本さん。子どもたちに「ポジティブにお世話になること」の大切さについて語ります。  
(只木良枝)



第4回  
JOES Davos Nextを語る  
東京大学大学院情報学環 特任助教  
山本良太さん

■■■■ Davos Nextの構想を知って、  
どう思ってますか？

これを実現するのは簡単ではないな、と思いました。まず自分が海外で生活している子どもの状況をイメージできなかったし、違う環境にいる子が同じテーマで話して噛み合うのかと。そもそも子どもたち自身に、自分の住んでいる国の環境や課題をきちんと説明できる土台があるのだろうかとも考えました。

Davos Nextのとても大きな構想を、どう具体化して落とし込んでいくか。ディスカッションの間の立て方や子どもたちへのアプロ

ーチの方法、学びを深めるためのツールの整備など、いわば詳細設計が、僕の役目だと思っています。「なぜ学ぶのか」の意味づけと、目の前の学習に取り組む意欲を喚起する仕組みがあれば、子どもたちの学びへのポテンシャルはまったく違ってきます。じつは、僕は勉強が大嫌いでした。「なんで日本人ばかりの教室で英語を話さな」といけないんだ」とか、思っていました。かつて勉強嫌いだったからこそ、学びのデザインの重要性がわかるんですよ。

Davos Nextには技術面の課題もあります。世界各国でインターネット事情が異なるなか、どんなツールを使えばディスカッションの場が実現するのか。いまその最適な方法を探っているところです。

■■■■ 開催まで  
あと半年に迫りました。

ここは「大丈夫」と言わないといけませんね(笑)。イベントの成功はもちろん重要ですが、僕は、それは出発点だと思っています。

今回のディスカッションが、自分が住んでいる場所や世界への理解を深める動機づけになってほしい。ですから、参加した子どもたちが家庭

に持ち帰り、家族や身近な現地の人との対話のきっかけにできるような「しかけ」も考えています。

■■■■ 世界中の子どもたちに、  
ひとことお願いします。

僕は子どものころ、家庭の事情で周囲の人にとっても助けられて育ったんです。それと、学生時代に研究室のプロジェクトでフィリピンの情報教育支援にかかわったとき、「教えてあげる」という気持ちで行って見たものの、現地の人に逆にお世話になるばかりで結局あまり役に立たなかったという経験があります。「お世話になったのにすみません、次はもっとブラッシュアップしてきます」と、また半年後に行きました。それがずっと続いて、いまでも現地の人たちとかかわりながら活動しています。

日本では自己責任とか迷惑をかけるないようにとかいわれますが、逆にポジティブにお世話になってほしい。するとこちらも、お返ししたくなるでしょう。そのプロセスで、相手のことがどんどん理解できるようになっていきます。そうやってたくさんの人とかかわって、自分の生活を豊かにしていいほしいですね。